

Special Thanks

立教大学 社会学部教授 阿部 珠理

私のローテクぶりは、「Mac なんても必要ない。昔のワープロ使えば」と息子に揶揄されるほどである。PC を使い始めて 20 年以上になるが、最初から Mac User であるのは、不器用なアメリカ人でも使いこなせるという触れ込みと、実際アメリカの友人たちのほとんどが、Mac User であるからだ。しかし歴代の私の Mac は、ほとんど文書作成にしか使われなかった。最近授業での必要性から

パワーポイント資料を使うが、これもアルバイトを雇って作成してもらった始末だ。ここ数年の進歩とえば、PC で DVD を見るようになったこと、音楽配信をダウンロードできるようになったことくらいだろうか。

言い訳になるが、やる気さえだせば、便利な操作法をたくさん覚えて、息子に馬鹿にされない程度にはなれるような気もしないではないが、その気がいっこうに起きないのである。そもそも電球の交換にも電気屋さんを呼ぶような家庭に育って、機械や器機のマニュアルを読むのが大嫌いである。そうゆう分野に頭を使うと、もともと大きくはない頭の容量が減じるような、まったく根拠のない恐れもある。かてて加えて大学院時代の恩師のインパクトである。

私の UCLA 時代の恩師は、もと劇作家という変わり種の女性だった。彼女がある授業の時に語ったこと、「教師というものは、どんなにテクノロジーが進んだ時代にあっても、アフリカの辺境で小枝一本で大地を黒板に教えることができなければいけない」に目から鱗が落ちた。爾来、それを信条に生きてきたので、人に会うのがお仕事であるフィールドワークはいっこうに気にならないし、対面コミュニケーションが人間を育てるという確信がある。私のゼミでの原則は、「感謝（ありがとう）と謝罪（ごめんなさい）は対面で」である。ケータイ牢獄に収監されたくないのに、iPhone は持っているが、メールほとんどしない（出来ない？）

さわさりながら、絶えず書いている職業である。なんかのミスタッチでやっと完成した文書が消えた！ さあ大パニックである。家にいようとどこにいようと、反射的にメディアセンターに電話する。するとメディアセンター職員が状況から推して、ひとつひとつ段階を踏みながら、文書を復旧してくれるのである。学会発表を前にこの手の大パニックが起きて、アメリカから電話したことさえある。私だったらとうにキレているに違いない、テクに超トロい教員を相手に、イラつく片鱗さえ感じさせない根気強いサポートぶりに、人間性の崇高ささえ感じます。メディアセンター職員のみなさん、長きにわたるサポート

にこの場を借りて感謝申し上げます。またこの度の PC 刷新での移行作業等では、メディアセンターの技術スタッフに大変お世話になっています。

かくのごとく、メディアセンターは、研究者へのテクニカルサポートというお仕事を充分にやったださる。

もうひとつの私が大変助かったメディアセンターのサポートは、目まぐるしく変わる教材ソフトへの対応。私は文化変容を授業で教える際、アメリカの 50～70 年代を事例の一つとしているが、この古い映像資料の多くは、アメリカの教育テレビの制作になる VHS や、アメリカの研究者の私家版 VHS であった。UC バークレーやコロンビアでの学生運動、ヘイトアシュベリーでのヒッピー風俗など、当時の貴重な映像資料は、授業には欠かせないが、これら多数の VHS をデジタル化してくれたのもメディアセンターである。さらに所属学会の年次大会や研究会における視聴覚環境設定などのテクニカルサポートも頂く。こうして書いてくるとメディアセンターに大変お世話になってきたことが、改めて認識される。ありがとうございます（対面でも！）